連載⑭

内海善雄（ITU前事務総局長）の

やぶ睨み「ネット社会」論

超人気のフェイスブックが醸す夢か現かの非現実的な世界

「六億人が利用」は本当？

チュニジアに端を発した中東の騒乱はフェイスブックが先導したと報道され、日本でもフェイスブックを特集した週刊経済誌が早々と売り切れになるほどの超人気だ。やがて六億人に届くほどの人がアカウントを持ち、アクセス数でグーグルをしのいでいるという。米未公開株式の取引サイトではフェイスブックの企業価値が数兆円にも達しているとしているから驚きだ。

アメリカでは、「フェイスブックを通じて旧友と親交を温めた妻が夫から離婚され」たり、「親が夢中のあまり、子供の世話を放棄した」などのニュースが報道された。日本でも一流新聞の社説が、「フェイスブックなどのソーシャルメディアが既存の政治秩序を一気に変える」と警告を発している。

このフェイスブックは本当に騒がれている通りのものなのか、少し冷静に見てみよう。

まず、本当に六億人が使っているのかという疑問である。世界の人口六十億人のうち、インターネットを使用している人は十八億人（二九％）を超えているとする統計（？）もあるが、大変怪しく、せいぜい数パーセントである思われる。仮に一〇％が使用しているとすると、六億人である。フェイスブック発表の六億人は総インターネット使用人口と同じことになる。

筆者は、フェイスブックがスタートして間もない六年前からアカウントを持っている。ＩＴＵ（国際電気通信連合）の部下の職員から勧誘のメールが来たので、即座に加入した。その後すぐに、元秘書から「友達」になろうとの誘いが来た。しかし、その後数年間、誰からも連絡はなく、フェイスブックは休眠状態であった。最近になって、「友達」になろうと検索して発見したフェイスブック利用者の、そのまた「友達」なども調べて、やっと二十人程度のＩＴＵ職員を発見することができた。

およそ一千人はいる、電気通信を専門とするＩＴＵ関係職員のうち、たった二十人ぐらいしか使用していないのである。人口割合では二％にすぎないことになる。

情報発信は簡単、かつ容易

「フェイスブックが先導した」と報道されているアラブの騒乱についても不思議である。多少土地勘のあるチュニジアについては、前号で指摘したとおり、インターネットサービスは前大統領夫人の関係企業が独占していた。政権批判はたちどころにブロックされていたので、フェイスブックが全く自由に利用できたとは考え難い。エジプトは識字率が五割ぐらいで、インターネット普及率は、怪しげな上記統計でも二〇％、世界平均よりは相当低い。

もちろん、フェイスブックなどの新しいメディアがデモの呼びかけや連絡に使われただろうが、高い失業率と食料品の急高騰などの生活の不満が、長い独裁政権に対して爆発したのであって、「フェイスブックが革命を起こした」と決めつけるのはいかがなものか？

もっとも、マスコミ報道も、当初の、「フェイスブックがジャスミン革命を起こした」から、「規制をくぐり抜けたフェイスブックが使われた」と今はトーンダウンしている。

しかしフェイスブックは、従来のメール、ブログ、ホームページ、プッシュ情報などの機能を統合したもので、きわめて簡便に利用できる。全利用者が自分の小さなホームページを持つのと同じことになり、情報発信は簡単、かつ容易になる。

既存のホームページやブログは、誰かが見てくれなければ意味が無い。したがって検索エンジンにいかにトップに検索されるかを競う。一方、フェイスブックは、限られた「友達」の範囲ではあるが「見せに行く」ところに違いがある。見せた情報に価値があれば、「友達」から「友達」へとネズミ算的に拡散する可能性がある。

北アフリカ・中東諸国の騒乱は……

綺麗事の世界

ミクシィなど、実名でないソーシャル・ネットワークは、そもそもゲームと同じ娯楽であり、仮想空間で他愛なく遊ぶだけのことである。実名で真面目な情報のやり取りを行うことが前提のフェイスブックは、ビジネス活動にも十分活用できる。「ファンページ」の口コミ情報が企業と消費者の新しい関係を築き、ビジネス・ビヘイビアも変わらなければならないと専門家は言う。新聞やテレビのマスメディアが上からの情報伝達であり、上からの世論形成であるのに対して、フェイスブックは、いわば草の根的な横の情報伝達による口コミ的な世論形成に大きく寄与する新しい手段であるといえる。

まさにその通りであるが、それは情報が何千、何万人にまたたく間に伝達されて初めて意味があるものである。しかし、そのようなことは、次のような理由で、なかなか起こりえないと思う。

フェイスブックの新規加入者が当惑することは、「いいね！」の評価やコメントが「友達」に全部通知されることである。そこで、ほとんどの人は、「友達」を情報が伝わってもよい真の友人に限定するか、あるいは、「プライバシー」の設定を厳しくして他人へ情報が伝わらないようにする。他人の情報が分かるからこそフェイスブックは面白く、有益であるのに、その情報が伝わらなくなると、ネットワークは閉じたものになり、価値は劇変する。加入者の大半は、このような利用しかしていないのだ。

また、フェイスブックの効用の一つに古い友人と連絡をとることができることがあるが、それはメールアドレスなどの個人情報が公開されているからである。それだけプライバシーが侵される犠牲を伴っており、それを嫌う者は利用者にはなれない。

また、自分の行動が公開されるので、誰も都合が悪いことは書かない。その結果、現実とはかなり遊離した、いわば綺麗事の世界が出現する。あたかも夢か現かの非現実的な世界がフェイスブックの世界なのだ。そのことこそが中毒症にもなるほどのフェイスブックの魅力だと言う者すらいる。

まだ出現して間もないフェイスブックをわれわれはどのように使い、この新しい道具が社会をどのように変えるのか、冷静に注視する必要があろう。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。早稲田大学客員教授。